

## 困りごとと解決で扉を開く ファーストアプローチの支援

前橋市認知症初期集中支援チーム ● 群馬県前橋市

今年度中に全市町村での設置が義務づけられている認知症初期集中支援チーム。群馬県前橋市では2013年度からいち早く取り組んでいます。大切にしているのは、認知症の人の掘り起しでなく、生活の困りごとにアプローチすること。手薄になりがちだったファーストアプローチをしっかりと担うことで、戸惑う家族の支援にもつながっています。

(編集部)

群馬県前橋市は人口33万9,000人、高齢化率27%。100m先でも車を使うといわれる自動車大国・群馬県の県庁所在地でもある。ここ前橋市では2013年度より、認知症初期集中支援チーム（以下、支援チーム）に取り組んできた。チーム員は、医師2名、歯科医師1名、看護師2名、作業療法士3名、社会福祉士1名で構成。4年間で支援事例は150以上にのぼる。

市町村が実施主体である「認知症初期集中支援推進事業」は、地域支援事業の一つ。認知症やその疑いのある人と家族を訪問し、多職種のチームで必要な医療・介護につなげるための支援を行う。初期の段階から適切にサポートをすることは新オレンジプランで盛り込まれており、今年度中に全国の市町村での支援チームの設置が目指されているところだ。

支援チームの存在意義として、早期受診・介護につなげることのみが注目されがちだが、前橋市のチームが大切にしているのは、本人と家族は何に困っているか、どうしたらその困難を解決できるかということ。チーム員の一人で、作業療法士の山口智晴さんはこう話す。

「初期という言葉には、早期発見だけでなく、ファーストアプローチという意味もあります。生活に支障が出て困っている本人、告知されて戸惑う家族への声かけなど含め、支援チームとしてかわれることは多いと思います」



作業療法士の  
山口智晴さん

山口さんの訪問に同行した。一人暮らしの瑞恵さん（仮名）宅へ。認知症の疑いがあり、1カ月前からチームがかかわっている。3回目の訪問という。

きっかけは、地域包括支援センターからの依頼。隣人と土地の境界線を巡ってトラブルになり、県外に住む息子さんが相談したことがきっかけだった。山口さんはアウトリーチで、どのような生活状況なのか、何に困っているのか、家族背景や経済背景から、病歴や既往歴、服薬状況、身体状況などアセスメントを続けている。

自宅の様子や生活環境などは訪問して初めて分かることも多い。この日の目標は、居室内。それまで支援者が入れたのは玄関先までだった。

瑞恵さんはおしゃべり好きだが、もの盗られ妄想がある。



支援チームの拠点は、「前橋市地域包括支援センター西部」内にある



蛍光灯を取り換える山口さん



訪問の合間にも、家族から相談の電話が入る

延々続く隣人への愚痴に、じっと耳を傾ける山口さん。30分ほどたつたころだろうか、しゃべり疲れた瑞恵さんが「何か飲み物を」と台所に行こうとした瞬間、山口さんが素早く動いた。「どうぞお構いなく」と言いながら、さらっとあがりこみ、すかさず室内の電気に注目。「この蛍光灯、点いたり消えたりしていますね、外しましょうか」「あらそう?」。すっかり山口さんのペースにはまった。

ついでに寝室や冷蔵庫の中身もチェック。カレンダーの書き込みから、次回の受診日や服薬状況なども聞き出す。隣人への愚痴はすっかりおさまっていた。

この日の訪問はひとまず成功。集めた情報は、次の支援に進めるうえでの大事な判断材料にもなる。

実はこうしたアプローチは、OTの山口さんの得意とするところだ。「コツは本人の困っていることを見つけ出して、その解決に協力することです」と山口さん。

支援チームへの相談事例では、認知症だけでなくうつ病など精神症状がある人も少なくない。生活が破綻していながらも介入を拒絶する人もいる。困りごとの解決は、そうしたときの突破口にもなるのだという。古くなった蛍光灯を取り替える、ごみ出しを手伝う等々。

「ささやかなことでいいので小さな親切をすると、この人は

味方だ、役に立つ人だと思ってもらえます」

山口さんは普段は群馬医療福祉大学リハビリテーション学部の教授として教壇に立つ。授業のない毎週木曜日を、支援チームの活動日にあてている。1日で3~4件の訪問をこなす。

相談の入り口は、市内11カ所の地域包括支援センター（直営1、委託10）。寄せられた相談は運営主体の前橋市地域包括支援センター西部が集約する。チーム員は常駐していないため、西部の職員が依頼票として取りまとめチーム員に連絡している。

委託先に丸投げでなく、前橋市は行政も一緒にやるというスタンス。行政側の担当者も毎回チーム員会議に参加し、関係各課はもちろん医師会等の関係機関とも連携を図っている。チーム員は全員非常勤だが、限られた時間で効率的に活動できているのはこうした仕組みがあるからだ。

告知はされた、でもどう過ごしていいかわからない、その混沌とした時期を乗り越えることは、これから認知症の人が増えてくる中で大きな課題だ。ファーストアプローチで丁寧に素早く動いてくれる支援チームの存在は、とても心強い存在だと感じた。

## コ ラ ム 観察と面接 作業療法士の技

支援チームのアセスメントの基本は、観察と面接。特に作業療法士は、日々の生活で生じる問題を、身体機能や認知機能、環境因子と結びつけて考えるのが得意だ。解剖学や運動学に基づく動作分析、作業工程分析の視点、認知症機能障害と行為障害を結びつけて捉える視点、身体機能の評価や基礎医学的な知

識を背景としたフィジカルアセスメントなど、「OTの養成教育課程そのもの」と山口さん。

本文で登場した瑞恵さんは、会話の中で何度かひざをさする場面があった。高いところの蛍光灯を交換する作業は難しいだろう、と山口さんは見抜いた。サインを見逃さず、対象者に入り込むその技に脱帽だった。